

市川市史

変貌する市川市域

歴史編
IV



口絵1

1958(昭和33)年頃
(市立市川歴史博物館蔵)



口絵2

『広報いちかわ』1587号、2018年3月3日付より

一九八〇年代、水害対策を目的とする真間川の護岸工事に伴い、桜並木の伐採が開始された。しかし、市民の声により、半数ほどの木は残され、今も花見や散策の場として親しまれている。



二世五姓田芳柳「国府台風景図屏風」
(神奈川県立歴史博物館蔵)

江戸時代以降、国府台周辺は江戸近郊の名所として錦絵などの題材となり、ここに掲載した国府台風景図屏風（1882〔明治15〕年）や八景園チラシ（大正～昭和初期）のように、江戸川とともに風光明媚な様子で描かれることが多い。

描かれた市川・国府台



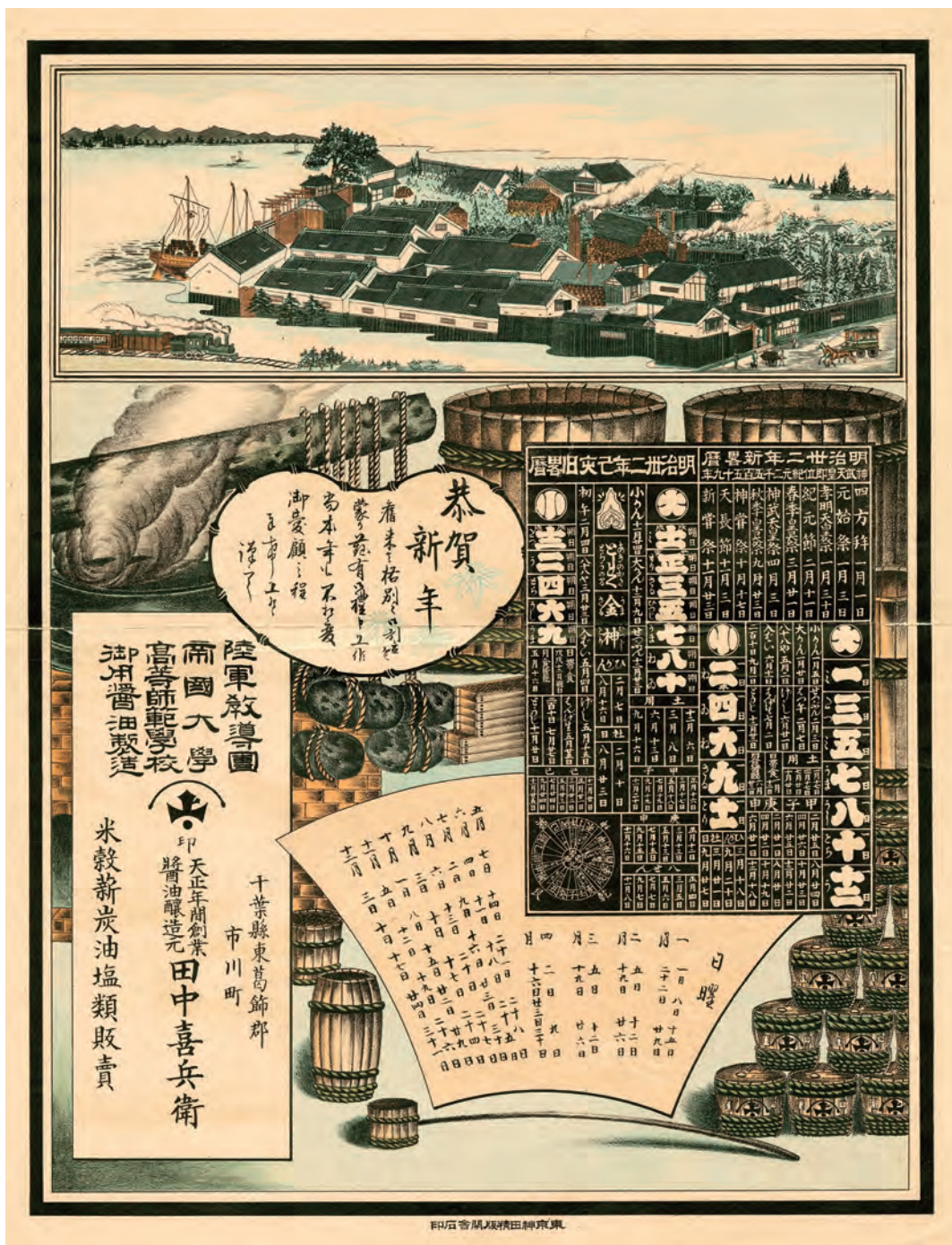
口絵3



口絵4

里見八景園チラシ
(市立市川歴史博物館蔵)

田中喜兵衛醬油釀造場引札



田中喜兵衛醬油釀造場引札

口絵5

(市立市川歴史博物館蔵)

市川橋の北側に所在した醤油釀造場の引札（1898年）で、建物や醤油樽などが描かれるとともに、陸軍教導団などのお得意先も記されている。



口絵6

南大野の住宅
2018(平成30)年



口絵7

梨畑と少年自然の家
1982(昭和57)年



口絵8

J:COM北市川スポーツパーク
2017(平成29)年

大柏地域では、梨畑など都市近郊農村の様子をみることができるが、かつて水田のあった場所は、宅地やスポーツ施設などに変わっている。



口絵9

絵葉書「中山工場全景」
(個人蔵)

日本毛織中山工場は、市内最大規模の工場として一九八二(昭和五七)年まで操業した。工場の跡地は業態転換し、ショッピングセンターとなった。



口絵10

鬼高周辺空撮
1999(平成11)年



口絵11

1972(昭和47)年



口絵12

2017(平成29)年

海水の遡上防止と水位の維持を目的として、1957年に竣工した行徳可動堰は、その後半世紀余りを経て2014年に改修されたが、行徳橋とともに今なお現役である。



口絵13

塩浜の倉庫群
2014(平成26)年

駅の開業により宅地化が進んだ行徳エリアには住民の憩いの場も多い。
一方で臨海部の埋立地には工場が建ち並び、近年は大規模な物流倉庫の
進出も著しい。



口絵14

南行徳内匠掘プロムナード
2014(平成26)年



口絵15

広尾防災公園
2014(平成26)年

行徳風景

まえがき

「変貌する市川市域」は、平成の時代から新たに刊行する『市川市史』の歴史編全四巻のうちの第四巻である。今回の『市川市史』歴史編は、テーマ別で編成されており、「地形と環境」・「ムラとマチ」・「まつりごとの展開」の各巻は、いわゆる時代区分を超えて論が展開されているが、本巻は近現代のみで各章を構成している。

本巻の特徴としては、前回の『市川市史 第四巻 現代・文化』が一九七五（昭和五〇）年に刊行されて以降の年月を中心に扱うことがあげられる。そのため、テーマ別で編成された歴史編ではあるが、市川市域の近現代を通史的にまとめる章が必要であろうということになった。そこで冒頭の第一章では、「現代市川のすがた」と題し、市川市が発している都市宣言を辿りながら、そのあゆみをまとめ、第二章以降は各論的に構成した。

第二章は、「市川を中心とする交通網の展開」である。ここでは、広域で交通を捉え、時代も広く明治から平成までを扱っている。また、鉄道・道路のみならず、舟運にも視点を注ぎ、多様な交通システムについて、市川市域を軸に論じていることが特色である。

第三章の「江戸川と真間川」は、二〇一四（平成二六）年に刊行された『市川市史写真図録 この街に生きる、暮らす』の編集過程で採録を断念したテーマを、本巻で取り上げたものである。江戸川と真間川という二つの特徴的な河川の治水と利水の両方向の動きをおさえ、水とともに生きる、という観点から市民活動にも論点を拡げて取り上げている。

第四章の「国府台周辺地域の変遷」は国府台という地にスポットを当てた章で、定点観察の意味合いも持っている。国府台は、原始から人びとの活動があったことが確認され、それ以降も歴史の舞台に登場する市川市域のなかでも著名な地といえよう。国府台という地がどのような変遷を遂げてきたかを近世終盤から平成という時間軸のなかで描き出したものである。

第五章は、「産業の変容と都市基盤整備」と題し、市川の名産である梨を主軸として農業、日本毛織中山工場の大規模な業態転換、公有水面埋立事業による臨海部、そして半世紀の時を経て開通した東京外かく環状道路という大きな四つの事柄を取

り上げた。

第六章は、『文化都市・市川』を掲げて」と題し、教育機関・文化施設についての叙述とともに、そこで活動する市民に着目して、文化都市を掲げる所以について考察している。

今回の市川市史は、「わかりやすく親しみやすい市史」を目標に編さんを進めてきた。紙幅の制限もあり、限定的な内容にならざるを得なかったが、市制施行八五周年の年に市民の皆さんにお届けできたことでご寛恕願いたい。

令和元年十二月

竹内 壮一